二〇二二年度

問題冊子

教科	科目	ページ数
国語	国語	14

試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。

解答の書き方

1. 解答は、すべて別紙解答用紙の所定欄に、はっきりと記入すること。
2. 解答を訂正する場合には、きれいに消してから記入すること。
3. 解答用紙には、解答と志望学部及び受験番号のほかは、いっさい記入しないこと。

注意事項

1. 試験開始の合図の後、解答用紙に志望学部及び受験番号を必ず記入すること。
2. 試験終了時には、解答用紙の1ページ目を表にし、机上に置くこと。解答用紙は、解答の有無にかかわらず回収する。
3. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

国語問題訂正

訂　　正

国語

問題冊子　3ページ

〔1〕　問題文の10行目

(誤)〈生き物として羊〉

(正)〈生き物としての羊〉

〔1〕 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

原初から古代の社会においては、結果的に交換したことになる行為も、初めからなにかを獲得し、所有することを目指して――それを原動力として――行われたのではなく、役に立つ手段だ、と考えられていたのでもなかった。むしろ、自分が産み出し、所有する富を手放し、贈る、というキミョウ㋐に自己消失的な（あるいは消尽的、自己犠牲的な）ふるまい方と深く結ばれていた。こんな自己消失的な次元、そして自己犠牲的な次元をうちに含んでいるふるまいは、どこか深いところで宗教的なもの――すなわち、原初的宗教性――に結ばれているのでなかったら、考えられないだろう。原始宗教の核心であるサクリファイス（供犠、つまり犠牲を捧げる祭り）になにかしら関わっているのではないかと推測される。

供犠（サクリファイス）において、ひとは、自分にとって最も大切な富を――たとえば、遊牧生活において、主要な、貴重な産物である羊を――、神に捧げる仕方で、犠牲にする。こうした供犠は、いつも祝祭と結ばれ、祝祭の運動を開いた。英国の民族学者であるロバートソン・スミスは、原始・古代のユダヤ教の優れた研究書『セム族の宗教』（一八八九年）のなかで、原始から古代にかけて「祝祭のない供犠はなかったし、また供犠のない祝祭はなかった」と指摘している。

こうした供犠＝祝祭は、まさに神々に贈与すること、このうえなく大切な生産物を贈り物にして捧げることとして受け止められていたに違いない。このとき、注目されるのは、神々に贈与されれば、産み出された富は有用なやり方で消費されるのではなく、むしろ無益な仕方で、ただし神の栄光にあずかる輝きをおびた仕方で消尽されると感受されただろう、という点である。産み出された富を費やすということが、なにものかに利益があり、役に立つと予測され、期待されたうえで、消費されるのではない。そうではなく、それを費やすことが、①そのこと自体において究極性を持ち、自らのうちに価値がある仕方で、消費されるのである。

そうした供犠＝祝祭にある程度まで類比される側面が、原初的な交流・交易にも含まれているのではないか。トロブリアンド諸島のクラと呼ばれる交流において、ひとが（ひとつの氏族・部族が）自らの産み出した貴重な財を、他の者に（他の氏族・部族

に）贈与するということは、その時点だけを取り上げて見れば、自分の手にしている大切な富を失うかもしれない危険にさらされることになるだろう。それにもかかわらず、クラという交流は、そんな危険をカエリみず（イ）、いわばのり越えて、あえて貴重な富を手放し、贈り物にする。そういう側面を持っている。それゆえ、一方から見ると、こうした交流は、自らの労働の成果である制作品＝生産物を思い切って手放し、放棄する仕方で、贈与し、捧げ物＝贈り物にする、という意味を持ちうる。つまり、その瞬間だけにせよ、生産活動や生産物に執着しない、自分の富に固執しない、という意味を持ちうる。

とはいえ、そうした自己消失の危険と富の（一時的な）放棄に沿う仕方で、いわゆる交換の過程――さらには獲得と所有の過程――が発展したことも確かである。つまり、他方から見れば、〈贈与する〉ということが、対抗贈与、返礼贈与の動きをユウハツ（ウ）し、さまざまなものの流通を促すこと、そして、ジュンカン（エ）させ、有用な仕方で消費させ、ひいては再生産を刺激することにもなる。それゆえ、エコノミー的活動を活発化させる。

このような〈贈与〉は、ほんとうに贈与と呼べるのだろうか。贈与としての贈与、交換的なものに帰着する部分に汚染されない、純粋な贈与なのだろうか。どこまでも曖昧（②）な両義性はつきまとうだろう。

義務という観念の側面から考えてみると、こうした原初の社会において、人々はどういう義務に服していると言えるだろうか。何を〈すべきである〉と感じているのか。「感じている」と言っても、むろん意識的に自覚しているとは限らず、無意識的に受け止めて従っている場合も含めているのだが。

モースは、原初の人々――その社会――が〈すべきである〉と感じ、従っている三つの義務をあげている。与える義務、受け取る義務、返す義務である。神々に贈与すること（大切な富を贈り物として捧げること）を、モースは「第四の義務」とも書いているが、むしろ諸々の義務の感情の源をなすのかもしれない。

なぜ精霊たちや神々に贈与するのか。サクリファイスというかたちで、貴重な生産物、自分に固有な大切なものを捧げるのか。供犠（サクリファイス）の発生と由来について、バタイユの『宗教の理論』（一九四八年頃執筆）を参照しつつ、仮説を立ててみよう。

供犠においては、その種族の最も重要な生産物が、神々（あるいは精霊たち）に捧げられつつ破壊される。たとえば遊牧民・牧畜民は一頭の羊を犠牲にして殺害し、農耕民は収穫した稲や小麦の初物を供物として奉納する。それらはこのうえなく貴重な生産物のはずだが、なぜ破壊するのだろうか。なぜ自分の食べ物として享受する以前に、まず捧げ物にするというかたちで差し出し、消失するのか（むろん供犠および祝祭がすんだあとには、食料や衣料などにするけれども）。動物の供犠の場合には、なぜ死の禁忌（タブー）をあえて破って血を流すのか。こうした〈破壊〉の祭りは実際不可解で、謎めいている。

たとえば牧畜民にとって羊は、長い労働と作業の末に飼育した成果である。そんな貴重な生産物をまず捧げ物にする。自分たちにとって最も大切で、有用な食料（肉）や衣類（羊毛）となる産物を、いわば無益なやり方で消費する（むしろ、消尽する）。なぜまず初めにこんな無益な消尽をするのか。羊を祭りとして殺害するということは、個々人がパーソナルに消費する目的で殺害することとは違う。羊を破壊するのは確かである。だが、なにを壊そうとしているのだろうか。

それは、〈生き物として羊〉を破壊したいのではないだろう。生命体としての羊を破壊したいのではない。そうではなく、〈事物化した羊〉を破壊したいのだろう。生産のための労働がネラう家畜であり、日々の仕事や作業の結実した成果である生産物としての羊は〈事物〉化されるのだが、そんな〈事物〉性を破壊するのである。

羊や稲は、本来的には、自然に与えられていた生命存在である。人間もそうであるような〈霊〉的な真実を秘めている存在である。程度の違いはあるかもしれない。が、しかし本性上の違いはない。けれども、規則的に労働し始めた人間はそうした自然的に与えられている存在を〈否定する〉仕方で捕捉し、自分の〈対象〉にする。手を加え、作り変え、有用な産物、制作品にする。野生の動物である羊を摑（つか）み、その野生状態から引き剝（は）がして〈家畜〉にするし、野生の植物である稲を捉えて、自然から引き出し、食料生産のための〈作物〉にする。いわば自分が〈主人〉となって支配する物に変える。つまり自分に役立ち、奉仕する事物に変える。

（湯浅博雄「贈与の系譜学」。一部省略した箇所がある。）

問一　傍線部㋐～㋓の片仮名を漢字で書け。

問二　傍線部①「そのこと自体において究極性を持ち」とあるが、どういうことか。わかりやすく説明せよ。

問三　傍線部②「曖昧な両義性」とあるが、どういうことか。具体的に説明せよ。

問四　傍線部③「〈事物〉性を破壊する」とあるが、どういうことか。六十字以内で説明せよ。

〔2〕 次の文章は、明治三十年代の小説、国木田独歩「画の悲み」の一部である。「自分」は思い上がった腕白な優等生であった。そして何よりも画を描くことが好きだったが、志村というおとなしい少年が画に優れ、教師や級友の人気を集めていた。対抗心を持った「自分」は、校内の展覧会で志村の作品を圧倒しようと一生懸命馬を描いた。以下はそれに続く場面である。これを読んで後の問いに答えよ。

さて展覧会の当日、恐らく全校数百の生徒中尤も胸を轟かして、展覧室に入った者は自分であろう。図画室は既に生徒及び生徒の父兄姉妹で充満になっている。そして二枚の大画（今日のいわゆる大作）が並べて掲げてある前は最も見物人が集っている。二枚の大画は言わずとも志村の作と自分の作。

一見自分は先ず荒胆を抜かれてしまった。志村の画題はコロンブスの肖像ならんとは！　しかもチョークで書いてある。元来学校では鉛筆画ばかりで、チョーク画は教えない。自分もチョークで画くなど思いもつかんことであるから、画の善悪はともかく、先ずこの一事で自分は驚いてしまった。その上ならず、馬の頭と髭髯面を被う堂々たるコロンブスの肖像とは、一見まるで比べ者にならんのである。かつ鉛筆の色はどんなに巧みに書いても到底チョークの色には及ばない。画題といい色彩といい、自分のは要するに少年が書いた画、志村のは本物である。技術の(ア)巧拙は問う処でない、掲げて以て衆人の展覧に供すべき製作としては、いかに我慢強い自分も自分の方が佳いとは言えなかった。さなきだに志村崇拝の連中は、これを見て歓呼している。「馬も佳いがコロンブスは如何だ！」などいう声があっちでもこっちでもする。

自分は学校の門を走り出た。そして家には帰らず、直ぐ田甫へ出た。止めようと思うても涙が止まらない。口惜いやら情けないやら、前後夢中で川の岸まで走って、川原の草の中に打倒れてしまった。

足をばたばたやって大声を上げて泣いて、それで飽き足らず起上って其処らの石を拾い、四方八方に投げ付けていた。

こう暴れているうちにも自分は、彼奴何時の間にチョーク画を習ったろう、何人が彼奴に教えたろうとそればかり思い続けた。泣いたのと暴れたのでいくらか胸がすくと共に、次第に疲れて来たので、いつか其処に臥てしまい、自分は蒼々たる大空を見

上げていると、川瀬の音が淙々として聞える。若草を薙いで来る風が、得ならぬ春の香を送って面を掠める。佳い心持になって、自分は暫時くじっとしていたが、突然、そうだ自分もチョークで画いて見よう、そうだという一念に打たれたので、そのまま飛び起き急いで宅に帰り、父の許を得て、直ぐチョークを買い整え画板を提げ直ぐまた外に飛び出した。

この時まで自分はチョークを持ったことがない。どういう風に書くものやら全然不案内であったがチョークで書いた画を見たことは度々あり、ただこれまで自分で書かないのは到底まだ自分どもの力に及ばぬものとあきらめていたからなので、志村があの位書けるなら自分もいくらか出来るだろうと思ったのである。

再び先の川辺へ出た。そして先ず自分の思いついた画題は水車、この水車はその以前鉛筆で書いたことがあるので、チョークの手始めに今一度これを写生してやろうと、堤を辿って上流の方へと、足を向けた。

水車は川向にあってその古めかしい処、木立の繁みに半ば被われている案排、蔦葛が這い纏うている具合、少年心にも面白い画題と心得ていたのである。これを対岸から写すので、自分は堤を下りて川原の草原に出ると、今まで川柳の蔭で見えなかったが、一人の少年が草の中に坐って頻りに水車を写生しているのを見つけた。自分と少年とは四、五十間㋐隔たっていたが自分は一見して志村であることを知った。彼は一心になっているので自分の近いたのに気もつかぬらしかった。

おやおや、彼奴が来ている、どうして彼奴は自分の先へ先へと廻わるだろう、忌ま忌ましい奴だと大に癪に触ったが、さりとて引返すのはなお慊だし、如何してくれようと、そのまま突立って志村の方を見ていた。

彼は熱心に書いている。草の上に腰から上が出て、その立てた膝に画板が寄掛けてある、そして川柳の影が後から彼の全身を被い、ただその白い顔の辺から肩先へかけて楊を洩れた薄い光が穏かに落ちている。これは面白い、彼奴を写してやろうと、自分はそのまま其処に腰を下して、①志村その人の写生に取りかかった。それでも感心なことには、画板に向うと最早志村もいまいましい奴など思う心は消えて書く方に全く心を奪られてしまった。

彼は頭を上げては水車を見、また画板に向う、そして折り折りさも愉快らしい微笑を頬に浮べていた。彼が微笑するごとに、自分も我知らず微笑せざるを得なかった。

そうする中に、志村は突然起ち上がって、その拍子に自分の方を向いた、そして何にも言いがたき柔和な顔をして、にっこりと笑った。自分も思わず笑った。

「君は何を書いているのだ、」と聞くから、

「君を写生していたのだ。」

「僕は最早水車を書いてしまったよ。」

「そうか、僕はまだ出来ないのだ。」

「そうか、」と言って志村はそのまま再び腰を下ろし、もとの姿勢になって、

「書き給え、僕はその間にこれを直すから。」

自分は画き初めたが、画いているうち、彼を忌ま忌ましいと思った心は全く消えてしまい、かえって彼が可愛くなって来た。そのうちに書き終ったので、

「出来た、出来た！」と叫ぶと、志村は自分の傍に来り、

「おや君はチョークで書いたね。」

「初めてだから全然画にならん、君はチョーク画を誰に習った。」

「そら先達東京から帰って来た奥野さんに習った。しかしまだ習いたてだから何にも書けない。」

「コロンブスは佳く出来ていたね、僕は驚いちゃッた。」

それから二人は連立って学校へ行った。この以後自分と志村は全く仲が善くなり、自分は心から志村の天才に服し、志村もまた元来が温順しい少年であるから、自分をまたなき朋友として親しんでくれた。二人で画板を携え野山を写生して歩いたこともいくたびか知れない。

間もなく自分も志村も中学校に入ることとなり、故郷の村落を離れて、県の中央なる某町に寄留することとなった。中学に入っても二人は画を書くことを何よりの楽にして、以前と同じく相伴うて写生に出掛けていた。

この某町から我村落まで七里、もし車道をゆけば十三里の大迂廻になるので我々は中学校の寄宿舎から村落に帰る時、決して車に乗らず、夏と冬の定期休業ごとに必ず、この七里の途を草鞋がけで歩いたものである。

七里の途はただ山ばかり、坂あり、谷あり、㋑渓流あり、淵あり、滝あり、村落あり、児童あり、林あり、森あり、寄宿舎の門を朝早く出て日の暮に家に着くまでの間、自分はこれらの形、色、光、趣きを如何いう風に画いたら、自分の心を夢のように鎖ざしている謎を解くことが出来るかと、それのみに心を奪られて歩いた。志村も同じ心、後になり先になり、二人で歩いていると、時々は路傍に腰を下ろして鉛筆の写生を試み、彼が起たずば我も起たず、我筆をやめずんば彼もやめないという風で、思わず時が経ち、驚いて二人とも、次の一里を駆足で飛んだこともあった。

爾来数年、志村は故ありて中学校を退いて村落に帰り、自分は国を去って東京に遊学することとなり、いつしか二人の間には音信もなくなって、忽ちまた四、五年経ってしまった。東京に出てから、自分は画を思いつつも画を自ら書かなくなり、ただ都会の大家の名作を見て、僅に自分の画心を満足さしていたのである。

ところが自分の二十の時であった、久しぶりで故郷の村落に帰った。宅の物置にかつて自分が持あるいた画板があったのを見つけ、同時に志村のことを思いだしたので、早速人に聞いて見ると、驚くまいことか、彼は十七の歳病死したとのことである。

自分は久しぶりで画板と鉛筆を提げて家を出た。故郷の風景は旧の通りである、しかし自分は最早以前の少年ではない、自分はただいくつかの年を増したばかりでなく、幸か不幸か、人生の問題になやまされ、生死の問題に深入りし、②等しく自然に対しても以前の心には全く趣を変えていたのである。言いがたき㋺暗愁は暫時も自分を安めない。

時は夏の最中自分はただ画板を提げたというばかり、何を書いて見る気にもならん、独りぶらぶらと野末に出た。かつて志村と共に能く写生に出た野末に。

闇にも歓びあり、光にも悲あり、麦藁帽の庇を傾けて、彼方の丘、此方の林を望めば、まじまじと照る日に輝いて眩ゆきばかりの景色。③自分は思わず泣いた。

（岩波書店刊『日本児童文学名作集（上）』による。なお、本文を変更した箇所がある。）

問一　傍線部㋐～㋔の漢字の読みを平仮名で書け。

問二　傍線部①とあるが、志村を写生したことが、「自分」に結局はどのようなことをもたらしたといえるのか、簡潔に説明せよ。

問三　傍線部②とあるが、どのように「全く趣を変えていた」のか、本文を引用しながら説明せよ。

問四　傍線部③は、前半部のある部分と対応している。その部分を指摘した上で、傍線部にあらわれている「自分」の状態とはどのようなものか、詳しく説明せよ。

〔3〕　次の文章は、『平家物語』の一節である。平清盛を中心に一時の栄華を築いた平家一門は、源義仲ら反平家勢力が迫る中、都を逃れて西へ向かう。皆が家族を連れて都を去る中で、平維盛（中将）だけは愛する妻子のためを思い、都に残して一人で去るという苦渋の決断をした。しかし妻子と離れて生きることに希望を失った維盛は、ひそかに一族のもとから抜け出して聖のもとで出家を果たし、その導きで熊野三山を参詣した後、極楽往生を願い那智の沖で入水する。この場面を読んで、後の問いに答えよ。

〈注1〉三の山の参詣、事ゆゑなく遂げ給ひしかば、〈注2〉浜の宮と申す王子の御前より、一葉の舟に棹さして、万里の蒼海に浮かび給ふ。〈注3〉遥かの沖に山なりの島といふ所あり。それに舟をこぎ寄せさせ、岸にあがり、大きなる松の木をけづッて、中将、銘跡を書きつけらる。

「祖父、太政大臣平朝臣清盛公、法名浄海。
親父、内大臣左大将重盛公、法名浄蓮。
三位中将維盛、法名浄円、生年廿七歳、寿永三年三月廿八日、那智の沖にて入水す」

と書きつけて、又沖へぞこぎ出で給ふ。①思ひきりたる道なれども、今はの時になりぬれば、心細う悲しからずといふ事なし。比は〈注4〉三月廿八日の事なれば、海路遥かに霞みわたり、あはれをもよほすたぐひなり。ⓐただ大方の春だにも、暮れ行く空は物憂きに、況や今日を限りの事なれば、さこそは心細かりけめ。沖の釣舟の浪に消え入るやうにおぼゆるが、さすが沈みもはてぬを見給ふにも、②我身の上とや〈注5〉思しけん。おのが一行ひきつれて、今はと帰る雁がねの、越路をさして〈注6〉鳴きゆくも、ふるさとへことづけせまほしく、蘇武が胡国の恨みまで、思ひ残せるくまもなし。「されば、こは何事ぞ。猶妄執の尽きぬにこそ」と思しめしかへして、〈注7〉西に向かひ手を合はせ、念仏し給ふ心のうちにも、「すでに只今を限りとは、〈注8〉都にはいかでか知るべきなれば、〈注9〉風のたよりのことつても、ⓑ今や今やとこそ待たんずらめ。遂にはかくれあるまじければ、此世になきものと聞いて、いかばかりか嘆

かんずらん」なンど思ひつづけ給へば、念仏をとどめ、〈注10〉合掌（がつしやう）を乱（みだ）り、〈注11〉聖（ひじり）に向かッて宣（のたま）ひけるは、「あはれ、人の身に、③妻子といふものをば持つまじかりけるものかな。此世にて物を思はするのみならず、後世菩提（ごせぼだい）の妨げとなりける口惜しさよ。只今も思ひ出づるぞや。かやうの事を心中に残せば、罪深からんなる間、懺悔（ざんげ）するなり」とぞ宣ひける。

〈注〉

1 三の山―熊野三山。
2 浜の宮と申す王子―那智の海辺近くにある神社。
3 銘跡―官位・姓名などを書き記したもの。
4 三月廿八日―当時の暦では春の末。
5 蘇武が胡国の恨み―蘇武が胡国の捕虜になった時、雁に故郷への手紙を託したという、中国の故事を踏まえる。
6 妄執―迷いや執着の心。死後、極楽往生を果たすには、それらを捨てて一心に念仏を唱えることが求められた。
7 西―極楽浄土のある方向。
8 都にはいかでか知るべきなれば―都に残してきた妻子は知るはずもないので。
9 風のたよりのことつて―風が運ぶようなはかない音信。
10 合掌を乱り―合掌の手を崩し。
11 聖―維盛を出家させた聖。維盛の極楽往生を助けるため舟に同乗していた。

問一　傍線部ⓐ「ただ大方の春だにも」、ⓑ「今や今やとこそ待たんずらめ」をわかりやすく現代語訳せよ。

問二　傍線部①「思ひきりたる道なれども、今はの時になりぬれば、心細う悲しからずといふ事なし」から読み取れる、この時の維盛の心情について説明せよ。

問三　傍線部②「我身の上とや思しけん」とはどういうことか、説明せよ。

問四　傍線部③「妻子といふものをば持つまじかりけるものかな」とあるが、維盛がこのように思ったのはなぜか、本文全体を踏まえて説明せよ。

問五　『平家物語』冒頭の一文に示されている、作品全体に流れている仏教的価値観を漢字四字で答えよ。

〔4〕

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。（設問の都合で、送り仮名を省いたところがある。）

貞観十三年、褚遂良為諫議大夫、兼知起居注。太宗問曰、「卿比知起居。書何等事。大抵於人君得観見否。朕欲見此注記者、将却観所為得失、以自警戒耳。」遂良曰、「今之起居、古之左右史、以記人君言行。善悪畢書、庶幾人主不為非法。不聞帝王躬自観史。」太宗曰、「朕有不善、卿必記耶。」遂良曰、「臣聞、守道不如守官。臣職当載筆。何不書之。」黄門侍郎劉洎進曰、「人君有過失、如日月之蝕、人皆見之。設令遂良不記、天下之人皆記之矣。」

（『貞観政要』）

(注1) 貞観＝唐の太宗の年号。
(注2) 諫議大夫＝天子の過ちを諫める官。
(注3) 兼＝兼任。
(注4) 知起居注＝天子の言行を記録する官。
(注5) 太宗＝唐の第二代皇帝。
(注6) 卿＝君主が臣下を呼ぶ語。
(注7) 比＝このごろ。
(注8) 左右史＝天子の言行を記録する官。
(注9) 当＝あたる。
(注10) 黄門侍郎＝天子の側近の官。

ⓐ 否

① 朕欲見此注記者、将却観所為得失、以自警戒耳。

ⓑ 庶幾人主不為非法。

② 臣聞、守道不如守官。臣職当載筆。

③ 何不書之。

〈注〉　1　貞観―唐王朝の元号。　2　諫議大夫―官職名。　3　知―つかさどる。
4　起居注―天子の言行の記録。　5　太宗―唐王朝の第二代皇帝、李世民のこと。
6　卿―君主が臣下に対して用いる二人称。　7　起居―起居注のこと。また、起居注をつかさどる官職。
8　左右史―左史と右史。古代の官職名。天子の言行を記録する官職であったと伝えられる。
9　載筆―筆を持って随行する。記録をつけること。　10　黄門侍郎―官職名。

問一　傍線部ⓐ・ⓑの読みを、送り仮名を含めて、すべて平仮名で記せ。なお現代仮名遣いで構わない。
問二　傍線部①はどういうことか、「為」の主語がわかるように説明せよ。
問三　傍線部②を書き下せ。なお文末の「と」は省略して構わない。
問四　傍線部③を、適切な言葉を補いつつ現代語訳せよ。その際、「之」の内容をはっきりさせること。なお文末の「と」は省略して構わない。
問五　褚遂良が傍線部③のように考えた理由を説明せよ。